雑誌『音楽界』に見る明治・大正期の音楽教育の実態に関する研究

―唱歌教育を中心に―

川　端　佑　始

（本講座大学院博士課程前期在学）

Meiji and Taisho Era Music Education in Japan as seen in Music World: Focus on Song Education

Yuji KAWABATA

Abstract

This study examines the actual state of music education in the Meiji and Taisho eras as seen in the magazine Music World, with a focus on song education. Music World was published from 1908 to 1923, spanning the Meiji and Taisho eras in Japan. The contents range from introducing songs, current Western music trends, styles of playing musical instruments and music theory. This can be read the purpose of trying to breathe fresh air into the music world over the field of everything aiming at new development based on cultural development until 1897. Though Music World is a prewar magazine, it was reprinted in 1995 and thus was highly influential at that time. Music World is compiled by information related to music from the item of a lot, and various musical information is mentioned in the respective items. Information was presented to concerned musician readers and became an index of music education. Therefore, it can be assumed that musicians throughout Japan participated in music education by referring to Music World. The state of school musical education is also mentioned, and thus the circumstances of such education in those eras are revealed. In this way, Music World refers to a variety of music information. Therefore, it is a suitable historical source for understanding the reality of the music education in the Meiji and Taisho eras.

Ⅰ　研究の目的

音楽関係の雑誌の出現は，明治 23 年創刊の『音楽雑誌』より始まる。西洋音楽の導入，普及が進まない当時において，『音楽雑誌』は唯一の専門誌であった。明治末期になり，西洋音楽が徐々に受容されるにつれて，音楽関係の雑誌数は増加し，それらが音楽界に与えるものは大きいものであったと推察される。明治 29 年に『音楽雑誌』が廃刊となると，その後新たに，明治 34 年に『音楽之友』（楽友社），明治 37 年に『音楽新報』（音楽新報社）が誕生した。『音楽之友』は後に『音楽』として改名され発刊された。この『音楽』と『音楽新報』が明治 41 年に統合され，新たに『音楽界』（楽界社）として発刊されるに至った。『音楽界』は明治 41 年から大正 12 年にかけて刊行された雑誌である。音楽その他の健全を期し，新しい音楽文化の創造と発展を目指して企画されており，「新音楽の建設」がこの雑誌のスローガンとして掲げられている。記事内容としては，歌曲の紹介，西洋音楽界事情の紹介，楽器の奏法について，楽典理論，音楽教育に対する論など，記載内容は多岐にわたっている。これは，明治 30 年代までの音楽の文化的展開を踏まえ，新たな発展を期して，あらゆる分野にわたって音楽界に新風を吹き込もうとしている意図を読み取ることができる。この雑誌『音楽界』は平成 7 年に復刻版として出版され，『音楽界』は当時において大きな影響力を持っていたことがうかがえる。

『音楽界』に記載されている音楽教育についての記事の多数を，唱歌教育に関する題目が占めており，

唱歌教授の指導法の良し悪しや，どの教材を選択すべきか，教授するにふさわしい教師の力量・思想はどのようなものかといった論が展開されている。ゆえに,『音楽界』に記載されている唱歌教授について考察することは，当時の音楽教育の実態について把握することにつながるのではないかと考える。

本研究では,『音楽界』明治 41 年 1 月号～明治 45 年 8 月号の発刊号を明治期，大正元年 9 月～大正 12 年 12 月号の発刊号を大正期と位置づけ,『音楽界』に記載されている唱歌教授を中心とした音楽教育に関する内容を検討することで，明治・大正期の唱歌教授の実態の一端を明らかにする。

Ⅱ『音楽界』に見る明治期の唱歌教育の実態について

（1）唱歌教材に関する記載

明治 41 年 1 月～明治 45 年 8 月に刊行された『音楽界』を見ると，当時の音楽教育の実態は，唱歌教授を行う良い環境が整っていなかったことがうかがえる。

『音楽界』第 1 巻第 1 号に掲載された武島又次郎の「唱歌改良論」（1908，pp.12-14）では，当時の音楽界には多くの論ずべき問題があるが, 目下の急務として唱歌を改良すべきだということが述べられている。

> （前略）また唱歌といふ物について考へてみると，我輩の眼中からは，まだ日本には眞の唱歌といふ物はないと思はれる。なるほど唱歌と名づけてをるものは，あまたあるかは知らぬが，あれはただ西洋の曲に日本のトンチンカンの言語をあてはめたものである。決して唱歌などとはいふべからざるものである。（中略）今日の唱歌が唱歌としての價値なき、つまらなきものに成り了つてをるのは、一には音楽家が唱歌といふものについて考へちがへをしている事、二には作曲家に罪があるといふ事、三には作歌者が又毫も音楽のことに智識をもつてをらむといふ事に基するのであるかと思ふ（中略）。唱歌といふものは、音楽には相違ないが、十分独立した音楽ではなくて、なほ詩歌の助力をかりてをる音楽である。いな詩歌をたすけるための音楽であるというてもさしつかえはあるまい。唱歌といふものは曲ばかり弾きて聞かせるものではなくて、同時に歌を歌つてきかせるものである。ただ歌にともなつて曲を弾くのではなくて歌の精神の発揮せらるるやうに曲を作らねばならぬのである。かくの如く唱歌に於ける歌と曲との関係は主従の関係である､少くとも唇歯の関係である｡歌をたすけないやうの曲であるならば、曲はなくても宜しい。その歌をただ歌ふより、一屍人を感ぜさするやうな節に歌はせるところに曲の価値が存するのである。この意味において歌と一致しない曲は、曲としてゼロである。（中略）我輩がこれまでの唱歌に真の唱歌は一曲もないというたのはこのわけである。（中略）歌と一致しない曲はかへつて歌の精神を傷つけるのである。ここにおいて歌と曲との一致調和といふ事､これは唱歌を作るもの編纂するものの常に念頭に忘れてはならぬ事であるのである。しかるに今日の唱歌を作るもの編纂するものは、わざわざこの主眼を閑却しやうとしてゐる。それは何であるかといふに、その人々はまづ西洋の楽曲をさがし出してそれに日本語の歌をつくるのである。ある歌の精神を発揮するために作つた曲にほかの歌を当てはめたというて、どうしてその精神の発揮せらるるやうな歌が出来ようぞ。（中略）何が故にこの無理な方法を敢てするかといふに、所詮は現時の日本の音楽界には、ある歌に作曲するだけの手腕のあるものがいないからである。よし作曲するものはありとも歌の精神を発揮するやうな作曲をなし得るものがないのである。ここにおいてか我輩はかういふ事を知る、それは唱歌の改良をなさんとならば、まづ真正の作曲家を養成しなければならないといふ事である（後略）。

武島は，歌についての理解が乏しく，また，当時作曲されていた唱歌の多くが外国曲に日本語の歌詞を当てはめただけのものであり，真の唱歌としてふさわしくないものだとしており，唱歌が価値のないものになっていると述べ，作曲者，作歌者について苦言を呈している。唱歌の教授を進歩させるためには目下の急務として唱歌の改良をあげているが，その唱歌の改良として，唱歌の作曲者，作歌者を育成し良い唱歌教材を普及させることが唱歌教授の改善であると述べている。

また，工藤富次郎は,『音楽界』第 1 巻第 1 号「教育音楽観（三）」（1908，pp.20-23）において以下のよ

うに述べている。

（前略）余は多くの教授者の中には「教材」と云ふ明瞭な考えを欠いて所謂無意識的の教材選択をやつているものの多かるべきを断言するのである。（中略）第一唱歌の著作物であるが先きにも少々述べた如く、今日良い教材の少ないと云ふことは教授者をして甚だ選擇に苦しましむる一原因であらうと思ふ。（中略）尚ほ考へて見れば多くの歌曲は兒童の思想感情に適しないものが多いと思ふ。題目からして兒童に遠かつたものが多い、それに内容まで作者の主觀的思想によつて作られては堪らないのである（中略）。更に歌詞と歌曲との調和に就いて一言を要する。多くの歌曲の中には随分甚だしい不調和なものがある、西洋曲に我國語の歌詞を当てはめる場合の如きは、歌曲の調和を計る上に於て非常な困難の事と思ふ、元来既に出来てゐる西洋曲に我歌詞をあてると云ふ事は既に理想的の事ではないのであるけれども、今日の場合止むを得ぬ時勢とすれば、編者たるもの此点に特に注意を払ふべき必要を感ずるのである。（中略）教材とすべき唱歌は、大いに責任のあるものであるから、余の作者たるもの亦十分に責任を以て作つてもらいたいと云ふ事を感ずると共に、玉石混淆の多数の歌曲の中から教材の選択を誤らぬ様にしてもらひたいと云ふのである（後略）。

ここで工藤富次郎は，教授者の中には明瞭な考えを欠いたまま教材選択をしてしまい，良き指導が行えていないとしているが，その教授者達を苦しませている理由として，唱歌の教材不足を指摘している。唱歌は音楽と歌詞とがどれほど調和しているかを見定め，教材として扱わなければならないが，従来の唱歌集は児童にとって不適当なものが多く，児童の感情にふさわしくない。また作曲者の主観によって作られているため，教材として不適当であると述べていることから，当時は依然として唱歌教授の際の良い教材が普及していないことが読みとれる。

（２）学校での唱歌教授に関する記載

『音楽界』には，学校現場で教育を行った経験談なども掲載されている。とある唱歌科教師（影法師「音楽教師経歴談」，1908，pp.33-34）の経歴談には，

（前略）授業して驚いた，案外不出來で大々的理想も頓挫せぬばかりに思はれた，（中略）當時学校の音楽は甚だ幼稚であつた，唱歌するには總て略譜で樂典は殆んと授けたことがない様で本譜の知識は更にない（中略）其上に音楽と云へば女子のみの専有物で男子のなす可きものではないと謂ふ歴史的且つ習慣的に頭が作られて居るので附属小学でも男教生は唱歌を受持たないと謂ふ有様で，此れまで音楽時間は極めて我儘勝手であつたこと（後略）。

と記してある。この教師が赴任した師範学校での唱歌教授の状況は非常に程度が低く，唱歌教授の授業が全くと言っていいほど機能していなかったことがうかがえる。

この唱歌科教師の経歴談については『音楽界』において数回連載されており，市内の小学校へ参観に行ったことや演奏会を開催したことなどが記載されている。その教師によると，赴任した県の唱歌科のレベルは低いもので，唱歌への理解の乏しいこと，教師の力量が不足していること，唱歌室や器具の整備が行き届いていないことなど，唱歌への理解・認識が学校現場において低いものであったと記してある。

明治期に刊行された『音楽界』から推察するに，当時の音楽関係者は，唱歌教育の推進をめざし尽力していたが，教授にふさわしいと言える良い唱歌の教材が普及されてないことや，またその唱歌を教授する適切な唱歌教授法が確立されておらず，学校での唱歌の教育はレベルの低いものであったと考えられる。これは教師の力量不足といった点や教材不足といった点も挙げられるが，音楽に対する認識の低さや唱歌教育を行う環境整備が行き届いていないことも原因である。

Ⅲ　『音楽界』に見る大正期の唱歌教育の実態について

明治 43 年に『音楽界』が「音楽教育會」の機関誌となったため発言力が大きくなり，影響力が高まったためか，大正期に入ると『音楽界』に記載されている唱歌教授に関する内容が徐々に変化していくことがわかる。

『音楽界』第 6 巻第 1 号～第 6 巻第 7 号にわたり数回掲載された，三重県師範学校教諭村上一郎（1913, pp.25-31）が寄稿した「吾が県下小学校唱歌科の概況を述べて，我が邦一般同学者の反省並に奮発を望む」には，県の小学校の状況を調査した記録がある。各小学校長，唱歌受持ち教師に学校の唱歌科の状況の調査結果から以下のように記述している。

> 我が校も亦大に研究をしているが、充分の効果を収める所には達しておらぬ、教員の中には趣味を有した者があるので研究も有望である、児童殊に低学年ほど喜んで、授業を受けます。
>
> （前略）従來唱歌は一般に軽視されたりし様思ひしが、近來力を此科に用ゐるに至りしはまことに結構なり、されど軽視されたる結果、その結果充分あらずして、この科の教授は、最も困難なるものなり、堂々たる本科教員が、自己の担任学級教授を、他に委託して顧みざる如きことは、在来珍しき事にはあらず、かかる事情のために或出張を実行せんとしても、果されず、遺憾なること多かりき、新卒業生の敏腕家の来らんことを望むや切なり。

これらの記述から，各学校において，徐々に唱歌への取り組みへの意欲が高まりつつあることがうかがえる。

> （前略）世間には唱歌科の眞想を了解し居らざるより，正則の教育をも受けず，樂典の初歩すらも辨へざる身で，オルガンの鍵盤を押へて，是に奇妙な發音をなし，以て大膽にも，この科の授業をなすものが少なからずあることを見受ける，実に危險千萬なこと（後略）。

この記述から,唱歌への関心が高まるとともに,各学校の音楽教師の技量に対して注目が集まっており，音楽教師の技量の低さが問題視され，正しく唱歌が指導できていないことを嘆いている学校もあったことがわかる。また，唱歌についての関心が以前より高まったとはいえ，調査の中には，以下のように答える学校もあった。

> 現今の小学校に於ける、唱歌教授の効果は一寸疑問である、文部省の要求してある域まで、到達するには、未だ未だ實に長き歳月を要すると思ふ、その効果の擧らぬには、教師の技倆拙きにも因るであろうし、設備の不行届にも基づくであろうが、尚その大原因の一つは、児童の脳裏に、音楽てふものが甚詰まらぬもので、唯歌を真似るといふ丈の、観念が蟠つて居るからではあるまいか、到底高尚なるもの抔の観念は存して居ないのみならず、是を軽視して、全く不必要なものと、思つて居るものが多い、勿論教育者の罪であろふが、往古より社会の思想が音楽唱歌を重んぜざる傾あるので、其が知らず、識らず先入主となつて、この可憐なる児童の思想を、支配するのではあるまいか、現にその家庭を見ると、其の父兄たり母姉たるものが、音楽は崇高なものとか、偉大なる感化力があるとか、音楽が淫靡になると、國が亡びるとかいふ様な、立派な事柄は分かつて居ない、都会はイザ知らず、田舎となると、其様な事柄の分かつて居る人は百人中は愚か千人中に一人もあるかどうか、かかる幼稚な教育思想を有して居る中から、そう能く分る児童は容易には生れて来ない、これ又止むを得ざる次第であると思ふ、当事者たる吾人は、一大努力を要するのである（後略）。

このことから，音楽教師の技量が唱歌の指導の効果に関係しているが，唱歌を教授する環境や設備が未

だ整っていないことも読み取れる。学校現場において，唱歌の関心が高まりつつある状況になっているとはいえ,依然として唱歌科教師の質が低いこと,唱歌教育を行えるより良い環境が整っていないことなど,望ましい唱歌教育が実現できていなかったことがわかる。

『音楽界』の記事の中には，唱歌科教師へどのような教授法を行えばよいか，また唱歌科教師としてどのような人物であるべきかといった記載も徐々に増加している。

『音楽界』第 162 号の静岡県静岡師範学校附属小学校唱歌研究会（1913，pp.16-27）が提出した「唱歌教授の研究」の中には，①低学年唱歌教授の主眼点，②唱歌の基本的教練，③如何なる教材を選定すべきか，④低学年における教授上の要項，という 4 つの観点から音楽教育の指標を示している。①低学年唱歌教授の主眼点では，児童が唱歌を正しくきれいに歌うためには，唱歌を楽しいものであると指導しなければならないこと，児童の各学年の発達に適応した教材を選択し指導行なうことが記載されている。②唱歌の基本的教練では，歌曲を教授する準備として呼吸練習，声音練習，調子練習，拍子練習，発想練習の 5 項目に分け，これらの練習を各学年の程度によって使い分け，唱歌を歌う予備的作業として行うと良いと述べている。③如何なる教材を選定すべきかでは，唱歌科は人格の修養に貢献するものであるため，題目，歌詞，曲節が児童にふさわしいものを選択すべきだと教材選択上の標準として，教材の例を挙げている。④低学年における教授上の要項では，小学校低学年に音楽の授業を行う際の方法，注意を細かく記載している。

また『音楽界』183 号の師範学校教諭荒木栄次郎（1917，pp.55-56）の「最近唱歌教授の研究」の中で，小学校唱歌教授の目的について次のように記載されている。

表 1　唱歌教授の目的

唱歌教授の目的	形式的方面	唱謡の技能の養成	発声法，発音法，調子
		美感の養成	審美的情操の喚起
		徳性の涵養	道徳的感情 国民的志操
	実質的方面	音に関する観念の教授	長短，高低， 音色に関する観念
		歌詞の解釈に関する知識の教授	内容，字句
		音楽上の理論の教授	音階，階名，拍子
		記録に関する知識の教授	楽譜記譜法

荒木栄次郎は唱歌教授の目的を，歌唱の能力を陶冶すること，即ち児童の発声の諸器官を修練し音の高低，強弱，拍子等音楽の基本概念を養い，歌曲を正しく歌唱すること，また歌を知的に理解すること，即ちつくられた韻文の歌詞を理解し，情操を養うこととし，唱歌教授を単なる歌の指導として扱わないように注意を促している。

以上のように大正期における『音楽界』は，明治期よりも唱歌についての関心が徐々に高まってはいるが，学校現場の実情としては，唱歌科教師の技量不足，環境や設備が十分に整っていないこともあり，唱歌教育があまり芳しい状況ではなかったことがわかる。またそのような状況であるため,『音楽界』の記載内容も，唱歌科教師に向けての指針となるような記事が掲載されていることがうかがえる。

Ⅳ　おわりに

明治期・大正期に刊行された『音楽界』を見ると，明治期の唱歌教育は，不振な状態である唱歌教育の現状を如何に打破するか,より発展するためにはどのような養成を行えばよいのか,教材が不足している,といったような，主に音楽関係者に対しての音楽情報の発信が多く,『音楽界』の役割が唱歌教育を推進すべく尽力しようとしていたことが推察される。大正期になると，徐々に唱歌の教材が普及し始め，音楽への理解が進んだため，今後は教師が児童生徒に対してどのような指導・教授を行えばよいか，また教師と

してどうあるべきかという地方の音楽の推進が掲げられた記載が増加している。また中央のみならず地方からも『音楽界』への寄稿が見られ，『音楽界』が全国の音楽関係者の関心を引いており，多くの情報を発信していたことがわかる。しかし，唱歌教育の実情は，全国的に見ても唱歌科教師の質が低いこと，唱歌教育を行う良い環境や設備が整っていないことなど様々な原因から，明治期と同様に依然として唱歌教育が不振であったことがわかった。

引用・参考文献

・荒木栄次郎「最近唱歌教授の研究」帝國樂事協会編『音楽界』第一八三号，pp.55-56，音楽社，1917。(『音楽界』第十七巻，大空社，1996)
・井上武士『音楽教育明治百年史』音楽之友社，1967。
・上原一馬『日本音楽教育文化史』音楽之友社，1988。
・工藤富次郎「教育音楽観（三)」『音楽界』第一巻第十一号，pp.20-23，楽界社，1908。(『音楽界』第二巻，大空社，1995)
・静岡県静岡師範学校附属小学校唱歌研究会「唱歌教授の研究」帝國樂事協会編『音楽界』第一六二号，pp.16-27，音楽社，1915。(『音楽界』第十三巻，大空社，1996)
・田浦桂三『近代日本音楽教育史Ⅰ』学文社，1980。
・田浦桂三『近代日本音楽教育史Ⅱ』学文社，1981。
・武島又次郎「唱歌改良論」『音楽界』第一巻第一号，pp.12-14，楽界社 ，1908。(『音楽界』第一巻，大空社，1995)
・村上一郎「吾が県下小学校唱歌科の概況を述べて，我が邦一般同学者の反省並に奮発を望む」帝國樂事協会編『音楽界』第六巻第一号，pp.25-31，音楽社，1913。(『音楽界』第九巻，大空社，1996)